

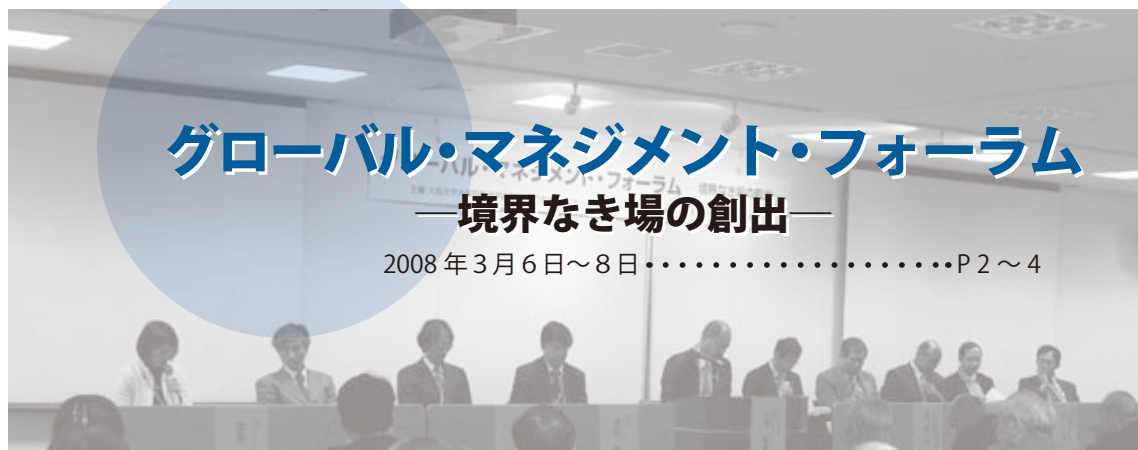
# OFC NEWSLETTER



Open Faculty Center

Graduate School of Economics, School of Economics, Osaka University

第8号 2008年4月発行



## グローバル・マネジメント・フォーラム

—境界なき場の創出—

2008年3月6日～8日……………P2～4



## OFC 講演会

第26回「IMF改革と日本の役割」……………P5

第27回「温暖化対策の制度設計

—日本が世界に誇れる国内制度と国際制度とは?—…P5

第28回「マクロ経済政策の展望」……………P6

## 業界研究会

2007年10月～12月……………P7～8

### OFC 運営委員会より

大阪大学も独立行政法人化して日が経つにつれ、各部署で改革なり、社会との連携を模索した動きが進み、少し変わったかなと言える部分もありますが、まだまだ外部の目から見て変革しなければならないことが多くあるのかもしれない。

このOFC（オープン・ファカルティ・センター）も経済学部創部50周年記念事業で設立された組織として、大学と社会の橋渡し役の任務を負っており、大学内に新しい風を入れたり、大学から社会への情報発信をしてきておりますが、まだまだ微力な状態です。とりわけ今年60周年を迎えるにあたり、それを強く感じる次第です。

民間企業のCSRと同様、大学の社会的責任を自覚し、より積極的に社会に向けた活動、学内の意識改革へと、大学、学生やOB、OGのみならず、広く一般社会の方々との連携を深めていきたいと思っております。

今後とも、OFCの活動に、皆様方のご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

大阪大学大学院経済学研究科 OFC運営委員長 福重 元嗣

# グローバル・マネジメント・フォーラム

—境界なき場の創出—

2008年3月6日～8日の3日間、JICA国際会議場と毎日インテントで開催しました。このフォーラムは大阪外国語大学と大阪大学との統合を機に、経済学研究科で経営学系専攻内に、修士課程コースとして新たに「グローバル・マネジメント・コース」を開設したのを記念して経済学研究科と共催したのですが、予想を上回る参加者に関係者一同喜びと同時に、新しいコースへの責任の重さを実感しています。

外部からの講師陣は多彩な顔ぶれで、研究科のスタッフを交えてグローバル社会のなかでのマネジメント問題を広い視点から議論していただきました。この会が、「多様性とボーダレスな状況を日々マネジメントしている方々と共に、21世紀をしなやかに生きるための戦略を考え、実感する場」となったと確信しています。その概要は以下の通りです。

## ワークショップ 第1日目

### 「環境をマネジメントする

#### —境界を溶かす—

グローバル化が進む今日、異なる思考・文化をもつ他者に加え、外部性としてこれまで認識されてきた生態環境が、あらゆる市場行為と企業経営に直接関係し、さまざまな問題となって我々に問いかけてきている。

その中で、企業・組織・個人は、境界の内部で均質化した社会を前提にするのではなく、多様な他者と区切りようのない環境と共存し、協働している事例が紹介された。



#### ☆「中心のないネットワークで世界を溶かす」

飯島 博 (NPO法人アサザ基金 代表)

霞ヶ浦を再生するためには、環境をゾーニングして管理したり、縦割りで問題解決しようとする「境界」を伴うアプローチを捨て、境界を乗り越え、境界を溶かすことが重要であると説く。

#### ☆「地域環境学のすすめ」

佐藤 哲 (長野大学 教授 生態学者)

これまでのアカデミズムが学問的蓄積や名誉のために作り上げられる傾向が強かったのに対し、これからは、地域の人々が環境を改善するのに役立つ学問、研究を目指すべきであること、それにはレジデンス型の研究が重要な役割を果たすことなどを実例で紹介。

#### ☆「里山 (SATOYAMA) を世界に」

村田 真一 (NHK チーフプロデューサー)

日本で里山に関する映像を作ったことがきっかけで、世界の各地で「里山」というコンセプトで映像作品をつくるうち、取材に訪れた地域の人々が、自分たちの自然との関わりに新たな価値を見出すというプロセスを、映像作品を使って紹介。

#### ☆「熱帯雨林の違法伐採を止める」

西岡 良夫 (ウータン・森と生活を考える会)

熱帯雨林の違法伐採を使用者側から止めてゆくための活動を続けておられ、行政や企業、現地社会に、境界をこえて乗り込み、不可能を可能にするアプローチを紹介。

#### ☆「太鼓が地域と地球をつなぐ」

菅野 敦司 (鼓童文化財団 事務局長)

一年の三分の一ずつを世界、日本、本拠地佐渡島で活動する太鼓集団「鼓童」の歴史的ななりたちを紹介し、地域固有の芸能を通じて、地域の環境を回復し、人々の意識を変え、世界の人々をつなぐ「鼓童」をささえる理念と実践活動について紹介。

## ☆「内モンゴル緑化のための起業」\*

坂本 毅 (元・青年海外協力隊隊員)

中国内モンゴルに派遣されたことがきっかけで、会社員やJICA調整員などを経て、現在はたった一人でビジネスを起こして、内モンゴルの産品を日本に輸入し、その利益の一部を内モンゴルの緑化のための資金として現地の緑化活動を助けるNGOでもODAでもない国際協力を実践。その行動の鉄則は、自分でできることから、偶然に身をまかせつつ、着実に目標をもって、少しずつ活動を続ける、である。

## ☆「南シベリアと微生物に学ぶ共生」\*

等々力政彦 (民族音楽家・微生物学者)

微生物研究者としての顔と、トゥバの喉歌(フーメイ)の世界的奏者としての二つの顔を持ちつつ、いずれも、異なる文化や個体がどのように他者とおりあって生きてゆけるか、という共通の疑問から出発し、生物は「足りない」状態にあるとき、多くの工夫をして、他者との共生を図ることが多いという示唆は、資源を浪費することによって「豊かさ」を謳歌している現代文明への警鐘と語る。両者に共通するのは決して「押し付けたり」「無理をしたり」することなく、しなやかに、互いがよりよく生きる道を作り出すその生き様にあると感じさせた。また報告は、自身のフーメイの演奏も交えて行われた。

(注) 演題の\*印は第1日目のテーマに属しますが、第2日目午前に実施。

第1日目に予定されていた「南米の音楽・民族と文化の融合」：千葉 泉(大阪大学人間科学研究科教授)はスピーチはなしとし、各スピーチの後に、中南米の歌と音楽によるコメントを披露するスタイルをとった。



## パーティーの様子



東南アジア各国の料理を用意した懇親会。パーティーにもグローバルの色彩が濃い。



パーティーを盛り上げる千葉楽団。息子さん、ゼミ生も混じった演奏。楽器の演奏が課題として与えられる?

## 第2日目

### 「異文化とコミュニケーションする

### —身近な他者との対話—」

#### ☆「小さな巨人シンガポールの底力」

亀田 尚己 (同志社大学教授)

日本の淡路島くらいの大きさにしか過ぎない国家シンガポールが、多言語政策を駆使しつつ、住民の多様性、多文化が混ざり合うその立地を最大限に生かしつつ、目をみはる貿易取引量、経済力を達成したその秘訣を語った。

#### ☆「コミュニケーションギャップのその先」

赤木 攻 (元・大阪外国語大学学長)

異文化と異文化が接触する場面はこのグローバル化した地球上ではしばしば見られる。しかし、その相互理解は簡単なことではない。コミュニケーションギャップを乗り越えるには、まず違いのある他者の存在や考え方を認めること、そのうえでできるだけ多く実際に対面のコミュニケーションを図ることがもっとも効果

的であることを、現在館長を務める東京国際交流館での経験や長年のタイ研究の蓄積から語った。

#### ☆「香港人の目から見た日系企業」

王 向華（香港大学准教授）

90年代香港に進出していたヤオハンに従業員として参与観察した研究をもとに、当時のヤオハンが現地従業員に日本本社や経営陣の理念を押し付けたこと、現地社員と駐在員との二元的人材管理システムをとっていたこと、などが現地職員の反発をかい、中国・東南アジアでの意欲的拡張にもかかわらず失敗した理由のひとつであったと語る。日本国内で培った経営理念をどのように現地適応してゆくかが海外市場進出には肝要であることを実例をもって紹介。

### フォーラム 第3日目

## 「多様性をマネジメントする —グローバル化の実践—」

#### スピーチ

#### ☆「中国人との間合い・天津伊勢丹の秘密」

稲葉 利彦（元・天津伊勢丹総経理、(株)セレスポ副社長）

中国天津における、百貨店経営における人材マネジメントの特質や課題の報告。

#### ☆「松下グループの中国事業展開」

青木俊一郎（元・松下電器中国総経理、日中経済貿易センター理事長）

海外展開への松下の理念とそれに沿った経営の特徴と、そこからくる課題などを広い視点で説明。

#### ☆「海外進出の失敗事例 — その原因と対応策」

久島 幸雄（双日プラネット(株)法務・リスク管理部長）

海外展開する中小企業における、合併や提携に付随する経営リスクについて、失敗事例を挙げての説明。

#### コメント

呉 松（中国大使館科学技術部一等書記官）

現在の中国は過去の中国からどう異なる特徴をもっているのか、その現状の面白さを紹介するとともに、各講演者の内容についてもコメント。

#### パネル討論

司 会：浅田 孝幸（グローバルマネジメントコース教授）

コーディネーター：小林 敏男（同上）

ディスカッション：高山 正樹・高橋 伸光（同上）

許 衛東・深尾 葉子（グローバルマネジメントコース准教授）

多くの視点から議論が行われ、フロアーからも多様な質問が出され充実した質疑が行われた。そのなかで、日本企業のマルチ・ドメスティック（多国籍化）化の戦略と企業としてのアイデンティティ・存在をどう担保するのか、このあたりが、大きな課題になりそうであるということ、様々な議論を取束させて終了。



### 運営責任者からのひとこと

私なりに、フォーラムの意義を考えていましたが、実際にやってみると、単なるグローバルマネジメントコースの社会的な広報、情宣を超えて、社会との新たなネットワークが構築できるのではと思えるようになりました。これでもう打ち切りでなく、2回、3回とやることで、グローバル・環境・コミュニケーションによる、新たな社会・アジア・Brics とのリンケージを創り、経済学研究科の新しい、無形資産にしていくことができれば、我々にとっても、大きな資産になっていくと思います。

今、環境問題こそ、コミュニケーションギャップの最大の懸案でしょう。多くの教育機関で、早期教育のなかの環境教育の必要性が叫ばれておりますが、成人の意識においても、グローバルな視野の意識・行動において大きな非対称性が存在し、その解消には、境界を様々なところで、溶かし、社会的な学習を重ねることが必要です。そのために大学機関のグローバルネットワークを有効に利用できるよう先生方の得意分野のそれぞれのネットワークが、大きな潜在力を発揮できる「場」として創りあげられればと思います。

（浅田孝幸 経済研究科教授 副研究科長）

## IMF改革と日本の役割

大阪大学大学院  
経済学研究科 教授

高木 信二 氏

2007年6月6日  
大阪大学中之島センター



最近はIMF（国際通貨基金）のことがニュースになることもなく、その業務に対する認識も薄くなっているが、長年IMFのエコノミスト、独立評価局審議役をされた経験からIMFの現状を考察し、改めてその存在意義を明らかにされた。さらには、世界経済の変貌に応じたIMFのあるべき姿を考え、機能させるために必要な改革と日本の役割について熱く語られた。

IMFの主な業務は、加盟国の為替相場政策、国際通貨制度の監視（サーベイランス）、経済安定化プログラムを支援する外貨の貸付、政府および中央銀行への技術支援である。これまで経常取引にかかわる決済の自由化には大きく貢献してきたが、世界経済の大きな変化（とくに資本取引の飛躍的拡大）に対応しきれないでいる。資本取引についてIMFは直接の権限を持っておらず、またIMFにそのような権限を与えるために必要な合意への道は遠い。

経済政策の分野では、各国を説得し、政策協調を仲介することが国際機関に期待されるが、その実効性は理論的にも、政治的にもむづかしい。IMFの意思決定はクォータ（出資額）に応じた投票権によるが、最近の新興市場国の台頭によって、先進国の



会場風景

声を過大評価した従来のガバナンスは合法性を失いつつあると指摘される。

IMF改革は日米を中心とする大出資国が指導すべきであり、日本の役割が期待されるが、大した貢献はできていない。財務省の政策立案能力を高めるためには、より戦略的な人員の配置、比較的人員に余裕のある日銀の専門知識のより積極的な活用などを考えるべきであると結ばれた。

◎参考図書等・・・

<http://www.imf.org/external/japanese/index.htm>

## 温暖化対策の制度設計

### —日本が世界に誇れる国内制度とは？

大阪大学  
社会経済研究所 教授

西條 辰義 氏

2007年10月24日  
梅田センタービル



日本は、温暖化防止に向け京都議定書の目標達成が可能なのだろうか？EUでは早期に欧州排出権取引制度を導入、試行を始めている。一方、我が国は未だ国民一人ひとりが努力し温暖化ガスを削減し、目標達成すると言いつけているが、目標達成に向けた「枠組み」をデザインする必要があると訴え、国情に合った「枠組み」がどんなものかその骨子を語られた。

まず、温暖化に関わるデータを紹介し、CO<sub>2</sub>排出の現状を分析した上で、京都議定書の特徴を

- ・生産をするのに温室効果ガスをたくさん使う物や化石燃料の価格を上げることによって、その消費をおさえる、そうすることによって地球温暖化から守る。
- ・議定書は排出量を固定し、その価格で調整するメカニズムを選択した。

と捉え、世間で話題に上っている炭素税は価格を固定し、排出量で調整するメカニズムであるから、京都議定書とは不適合であり、炭素税を骨格とする政策では京都議定書を遵守できない可能性がある」と判断する。

したがって、国の枠組みないしは骨組みとして採用すべきことは排出権取引であると言い切る。その上で、国内制度設計として、上流還元型排出権取引制度を提案し、その骨格を例示して解説する。

化石燃料のほとんどを輸入に頼っている日本では、政府が化石燃料の輸入主体にオークションを通じて排出権を販売。輸入した化石燃料に含まれる炭素含有量と同量の排出権の保有を輸入主体に義務付け、政府の排出権販売収入を輸入主体に還元する。

この制度では化石燃料が国内に入る時点という意味で「最上流」であるが、下流企業も自ら C D M（クリーン開発メカニズム）などを通じて、海外から排出権を確保し、それを上流企業に渡すことでこの制度に参加できる。



質問風景

さらには、この上流還元型排出権取引制度で成功し、この制度の国際版である U N E T S を世界に提示し、地球を温暖化から救う制度設計を日本から発信しよう！と結ばれた。

◎推薦図書等・・・

西條 辰義「上流還元型排出権取引制度」  
(日経エコロジー 2007年10月号)

## マクロ経済政策の展望

慶応義塾大学 教授

竹中平蔵氏

2007年11月30日  
東京・鉄鋼会館にて



年1回の東京での講演会。同窓会組織の「東京待兼会」、「青雲会東京支部」（法学部同窓会）との共催で開きました。同窓生を中心に150名を超える聴衆のなか、熱の入った講演で盛り上がりました。

講演要旨については、都合により割愛させていただきます。



## 寄附講義

### 「アセットマネジメントの理論と実務」

第一学期（4月～7月）毎週火曜日全13回  
(社)日本証券投資顧問業協会、(社)投資信託協会からのご寄附により、資産運用の機能や社会的役割を踏まえつつ、「リスク」の概念、資産運用における予測や投資の手法、市場や法制度などのしくみ等の講義が行われました。講義対象は学生で、講師は、各企業などで活躍の実務経験豊富な専門家。O F C は、講義の事務作業を請け負いました。



## “ 業界研究会 ” への支援



司会風景

これまで「業界研究会」は、小林ゼミ・山内ゼミの3年生有志が自主運営する団体で、経済学部学生の就職支援の活動を行っており、大学としての関わりは場所提供のみでした。具体的には企業各社を豊中キャンパスに招き、業界や企業の説明会を開催することを主な活動にしていました。

一方OFCでは「就職セミナー」の開催で、就職活動ガイダンスと同窓会の協力を得ての先輩方に業界の話をしていただく機会を持っておりました。

今年度から学生諸君と相談し、これまでの業界研究会をより充実させるため、自主運営の精神を尊重しながらもOFCが後方支援していく形をとることにしました。部屋の確保、配布冊子の作成補助、チラシ印刷など

学生諸君には負担になる部分のサポート、企業との折衝がうまく進まないときの



冊子

アドバイスなどが支援の中心です。また、学生にとり1年限りの活動の連続で、とかく引継ぎがうまくいかない部分を補う役割も受け持つことにして、翌年の活動がスムーズに行われる体制作りを助けられればと考えています。



会場風景

結果的には、10月から12月中旬まで、毎週木曜日の午後、1番教室にて、合計37社の企業を招き企業説明会が開かれ、多くの学生が参加しました。中には評判を聞きつけ吹田キャンパスや箕面キャンパスからの他学部学生もいました。

名前しか知らなかった企業・業界のこと、ごく一般的なことしか解っていなかった業界について、直接に企業の方から話を聞いて興味が湧いたり、もっと自分で調べてみようとする意欲が湧いたり、これから始まる自分たちの就職活動に役立っている様子でした。

また、「業界研究会」のメンバーにとっては、招致企業の候補選び、企業との折衝を含め、企業説明会を開催する準備全般について、企画・運営の業務の難しさを体験し、会の結成当初に比べ、何かと自信に満ちた運営をやっている姿に、この会の存在価値を再発見した次第です。

同窓会との共催として「先輩-学生交流会」を開催し、先輩から企業選びなどについて、ざっくりばら



質問風景

んなお話を聞く場の提供も試みました。時期、場所の選定の問題から、結果的には参加者が少なかったものの、参加者からは先輩のお話が聞けてよかったとの感想が寄せられました。

2月には「業界研究会」の今年度の新たな試みとして、一部のメンバーから自己分析や就職面談をグループで行う提案が出され、企業の方々の応援を得ながら実施され、模擬面接では本番さながらで、四苦八苦しながら挑むなど、自分を深く見詰めるよい機会になったようです。

OFCの役割として大学と社会の橋渡し役と謳われていますが、学生と社会、学生と先輩の橋渡し役にも力を入れていければと考えています。



## 編集後記

☆ニューズレター原稿をあれこれ作成しながら1年を振り返り、活動がどうであったか考えることになる。計画通り実施できなかった講演会。その代わり研究科との共催フォーラムは、これまでの経済学部フォーラムと違った面からのアプローチもあり、フレッシュな印象とともに新たな切り口でものを見るきっかけを提供できたと思う。

☆就職セミナーに替わり、学生諸君の業界研究会を支援する活動は、OFCの存在が学生と社会をつなぐ上でプラスとなっただろうと自己評価したいが、企業の方々の肝心の学生諸君にはどのように受け取られているのだろうか。専攻している分野の勉強をさらに深める努力も必要だが、実社会の動きにも関心を持ち、よりよき社会人として有用な人財に成長していく手助けができればと引き続きサポートしていきたい。

☆OFCの活動も時代の変化に対応した変革が望まれている。その体制作りが急がれる。気持ちをリフレッシュさせ、みなさまのご期待に沿えるよう奮起すべきときだと感じながら編集の筆を置く。

(城山徹夫)

☆昨年度、新たに取り組んだのは、投資顧問業協会等による寄附講義の支援と、業界研究会の支援でした。

☆寄附講義「アセットマネジメントの理論と実務」では、初めて「講義アーカイブシステム」を利用しました。講義風景をカメラで撮影し、学内のパソコンからインターネット上で学生が視聴できるというものです。機械なのでたまにうまく収録ができないというトラブルもありましたが、学生にとっては復習ができたり、欠席時に役立ったりと、アンケートからは好評の声を見つけることが出来ました。

☆業界研究会は、活動の主体は学生なのですが、ときには助言を求められ、教えてあげたり、ときにはこちらが重たい資料などを運ぶときなどは助けてもらったりして、大勢で仕事できて楽しかったです。リーダーである代表の二人は、皆を取りまとめるのが大変そうでしたが…。学生たちにとっては、企業の方と接することのできる、いい機会だったのではないかと思います。

☆来年度も、いつものOFC講演会、公開講義に加えて、上記の二つも実施する予定です。大学と社会の橋渡しに貢献できるよう、これからもがんばりたいと思います。

(鈴木友愛(旧姓:中))



\*各講師の肩書きは、講演当時のものです。

大阪大学大学院経済学研究科・経済学部  
オープン・ファカルティ・センター (OFC)



OFC 運営委員:

大阪大学大学院経済学研究科 教授 福重 元嗣  
(運営委員長)

大阪大学大学院経済学研究科 教授 三野 和雄

大阪大学大学院経済学研究科 教授 小林 敏男

ニューズレター編集: OFC事務局

(城山徹夫 鈴木(中)友愛)

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-7  
電話 06-6850-5259 FAX 06-6850-5268

eメール ofc@econ.osaka-u.ac.jp

http://www2.econ.osaka-u.ac.jp/ofc/